

第43回

義足ジャンパーが描く「着地点」

※2024年5月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

1 / 2

パリ・パラリンピックまで4カ月を切った。だが、日本初の義足アスリートの第一人者は、まだパリへの切符を手にできていない。パラ陸上短距離・走り幅跳びの山本篤選手（新日本住設）だ。世界の第一線で活躍してきたレジエンドは、自らの競技生活の「着地点」をどう考えているのだろうか。

「この1年が、（引退するかどうかの）山場かなと思っていますよ。今は、今季いっぱい（で引退）という気持ちでやっています」

進退について率直に聞くと、返ってきた第一声は今季への覚悟がにじむものだった。出場できればパリは5回目の夏季パラリンピックになる。

だが、2008年北京大会の男

子走り幅跳びで銀メダルに輝き、日本初の「義足アスリート」としてメダリストになったベテランは、まだパリの出場権を得られていない。全ては5月17〜25日に神戸市で開かれるパラ陸上の世界選手権の記録次第という状況だ。

高校生だった0年に交通事故で左太ももから下を切断した。義肢装具師の専門学校で競技用義足と出会った。16年リオジャネイロ・パラリンピックでは、走り幅跳びで銀メダル、男子400メートルリレーで銅メダルを手にした。

20年余りの競技人生で「競技をやめたい」と感じたことはほとんどなかったという。理由は「もっと遠くへ跳びたい」「もっと速く走りたい」と思ってきたから。実

際に39歳で臨んだ21年東京大会の走り幅跳びで、6.75の自己新記録を更新して4位に入賞し、進化を続ける姿を記録で証明した。

山本選手はこう語る。

「対、自分なんです。記録の向上が臨めるかどうか」

左肩の脱臼などのけがを乗り越え、自己ベストを更新した地元開催の東京大会は「ゴール」ではなかった。「まだここが限界ではない。自分のやり方は間違っていない」。競技への意欲はむしろ高まっていたという。

そんな山本選手が初めて「引退」を意識したのは昨年だ。春先の国際大会で腰を痛めると再発を繰り返した。「痛いし、やる気が出ない。これ以上やっても記録が出ないのではないか」。長引くけがは、さすがに答えた。

ただ、支えになったのは神戸での世界選手権開催だった。世界選手権は世界屈指のトップアスリートが集う。東京大会は新型コロナウイルス禍もあり、地元開催でも

無観客だったが、神戸は一般来場が可能になる。自分の競技する姿やパラスポーツの魅力を直接届ける大きなチャンスで「絶対に出たい」と自らを奮い立たせてきた。

少しずつ腰の痛み癒え、年明けから順調に記録が伸びてきたことで、失いかけたモチベーションも再び上がっている。パリ大会に向けては「出られるのであればメダルを取りたい。勝負をしたい」。母校でもある大阪体育大を拠点に週の大半をトレーニングに当て、まずは神戸に照準を合わせる。

3人の男児を育てる父親でもある山本選手。時折冗談交じりで子どもに「やめてもいい？」と聞いてみると、必ず「ダメ」と言われるそうだ。「やりきって終わりたいですね。中途半端な状態でやめたくない。もし、まだ記録が伸びそうであれば来年も続けますよ」。義足ジャンパーの日本の第一人者が、納得できる「着地点」は、どこになるのだろうか。